

移民2世 苦難の記憶

原生林開拓 6歳から農園で働いた

120年前、日本とブラジルが修好通商航海条約を結び、神戸港から多くの日本人がブラジルに渡った。神戸市須磨区の楠本昇さん(86)の両親もそうだった。貧しさから抜け出すため選んだ遠い異国での暮らしは苦難の連続だったが、黙々と働き、生活を軌道に乗せた。楠本さんは「原生林を切り開いて生きてきた日々を思えば、ブラジルも日本も大きく発展した」と振り返る。

(鈴木久仁子)

神戸・須磨の楠本さん

1926年、三重県出身の元軍人夫婦が子どもを連れ、神戸港からブラジルに向かった。楠本さんは、夫の間末払い。衣服も生活用品も買えず、逃げ出したという。みそもし



ブラジルでの日々を振り返る楠本昇さん(右)と、娘のソニアタカコ楠本さん(神戸新聞社(撮影)・小林良多)

日本ブラジル 外交樹立120年 「我々の努力が両国友好の礎」



ようゆもなく、脂っこい干し肉や干し魚は口に合わなかった。母はなじめず、「日本に帰りたい」とよく泣いていた。

その後、父親は綿作りの農園で働くようになった。昇さんも6歳から農園で働き、父親

日本人のブラジル移住の歴史	
1895年	パリで日本ブラジル修好通商航海条約調印
1908年	初めての移住者781人を乗せて笠戸丸が神戸港を出港
1915年	日本移民がパラナ州北部の開拓を開始
1928年	移住者が出航前に過ごす国立移民収容所(旧神戸移住センター)が完成
1941年	戦前最後のブラジル移民船が神戸港を出港
1942年	ブラジル政府は日本との国交断絶を通告
1952年	17家族が戦後移民第一陣として神戸港からアマゾンへ出発
1971年	神戸港最後の移民船「ぶらじる丸」が出港

入植の歴史紹介 24日から企画展

企画展「日本移民の汗と涙がやると花開いた」日本入植者から逃れたため1915年ごろから肥沃な土地に恵まれたが、神戸市中央区山本通3の海外移住と文化交流センターで開かれる。

日伯協会主催で、日本ブラジル外交関係樹立120周年記念事業の一環。パラナ州北部への入植の歴史や生活ぶりを37枚のパネルで紹介する。

日本人移住者の多くはサンパウロ州のコー

昇さんは「日本のために働きたい」と叔父のいる朝鮮半島に行くことを決意。千人針を授けられ、壮行会で送り出されたが、業者にだまされ、渡航することはいきなり多岐にわたる。2012年、2人の娘がいる日本を初めて訪れ、今は長女のソニアタカコ楠本さんと暮らす。

ブラジルには「ジャポネス・ガラランチ」という言葉がある。日本人は信頼できる人という意味だという。

昇さんは「日本移民の努力がブラジル社会にいかにか貢献したか。これからは両国友好の歴史は続いていく」と話している。

兵庫県と友好提携を結び、今年45周年。日伯協会の細江清司事務局長は「努力の末に、『夢の国』を体現、故郷に錦を飾る人がいる。移民の歴史を知ってほしい」と話している。

12月23日まで。月曜休館。入場無料。

伊丹市出身なので、丹大使をさせていたでいます。清酒発祥の地。風情が感じられる。梅が豊かで桜、薔薇、梅が美しい花々に彩られ、飛行機だっていろいろな都市に飛び立つよ！

そして、4年前にお

サル、ヘビ、ビューマなどがいる原生林を切り開き、町をつくった。ブラジル・パラナ州(1953年、楠本昇さん提供)



夕刊
発行所 神戸新聞社
〒650-8571 神戸市中央区東川崎町1-5-7
電話 (078) 3622局
報道部 7040 文化部 7044
経済部 7094 販売局 7066
運動部 7095 営業局 7081
映像部 7047 地域活動局 7086
パートナーセンターお客さま室
078-362-7056

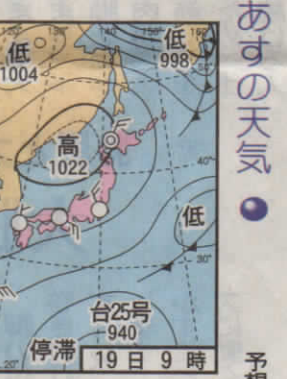
うさぎ
植垣米菓
自然の味を守って...
Try our taste
www.uegaki-beika.co.jp

0120-16-8349
(日・祝 9:30~17:30)

の風後北東の風 晴
東の風日中南西の風

風後南の風 晴時々
南の風日中北の風

気象協会関西支社



6時 9時 12時 15時 18時

